

高柳健次郎先生に学ぶ

1、ビクターテレビ技術講習会と高柳先生のご講演

日本の本格的なテレビ放送は、昭和 28 年（1953）2 月 1 日 NHK 東京で開始されました。順次全国でテレビ放送が開始され当社の販売戦略上、テレビの設置やサービス技術の特約店にも伝授することが重要との判断からでしょう、札幌から福岡まで全国 6 カ所の営業所から 1 名ずつ選抜され講師教育が実施されました。私は名古屋営業所代表として昭和 32 年（1957）7 月 21 日から 8 月 5 日まで横浜工場でテレビ技術課、青池さんの特訓を受けました。

名古屋営業所管内でも各地で「ビクターテレビ技術講習会」を始めましたが、本州日本海側初のテレビ放送の開局は、NHK 金沢で昭和 32（1957）年 12 月 23 日の事です。

その開局前の昭和 32 年 9 月 3 日、本社から高柳先生をお迎えして金沢地区ビクター有力特約店様対象のビクターテレビ技術講習会を開催しました。（9 月 7 日には富山で開催）



（左端 筆者）

（中央 高柳先生）

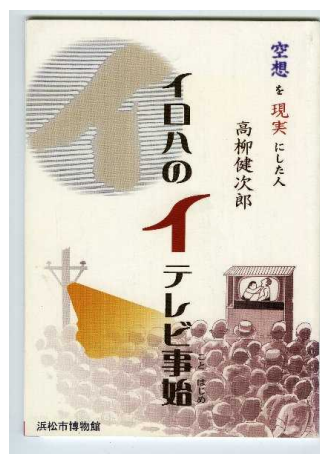
高柳先生は、”イ”の字にはじまるテレビ開発の歴史を話されましたが最後に「将来は人工衛星を地球上に 3 個打ち上げてテレビの世界中継が可能になる」というお話をされました。まだ人工衛星などまったく知られていない時でした。ソ連の人工衛星スプートニク 1 号が突然打ち上げられたのはこの 1 ヶ月後の 1957 年 10 月 4 日のことです。今でこそテレビの世界中継は当たり前のように思われますが、当時はテレビ放送が始まったばかりで人工衛星などと云う SF の世界のようなお話に特約店の皆さんもビックリの様子でした。NHK 金沢放送局のテレビ放送開局を記念した高柳先生のご講演は、有力特約店様に大きな衝撃と感動を与えました。そのあとテレビの技術説明を高柳大先生の前で私がさせていただいたのですが冷や汗ものでした。

高柳先生の判りやすいご講演と金沢まで遠路を気軽にお越しいただいた事に感激いたしました。こういうご縁から浜松の高柳先生のご親族宅のテレビの修理、調整等に何度かお伺いし、その折、「キッチンム」でご馳走になったことを懐かしく思い出します。

2、浜松市博物館の企画展 ” 空想を現実にした人 高柳健次郎 ”

平成 18 年(2006)12 月 16 日から翌年の 1 月 21 日まで浜松市博物館で「イロハの”イ” テレビ事始 高柳健次郎展」が開催されました。平成 19 年 1 月 7 日、新幹線にゆられて一日がかりで見て参りました。展示品、販売されていた解説書とも大変充実した内容で、当社や高柳健次郎記念財団その他多くの関係者、部門の方々が展示物や資料の提供など絶大な協力をされた事が銘記されていました。じっくり資料や展示品を拝見し大変感動して帰路についたのですが、昔、高柳先生のご親族にご馳走になった「キッチンム」がまだあるだろうかと記憶を頼りに尋ねてみたら健在で、食事をしながら往事の思い出にしばし浸ったのでした。

(浜松市博物館 展示内容の一部)



(浜松市博物館が準備した 解説書 — 中身の濃い小冊子にまとめられている)

この解説書、小冊子ですがこれを読むと若い頃からの研究の歴史や資料が沢山揃っていることがよく分かります。比較すべくもありませんが、我が身を振り返ってみて孫たちに何か残せる物はあるだろうかと考えると何もなくてお寒くなりました。

3、ウイットに富んだ高柳先生に学ぶ

難しい理論展開を日常されておられて「カチカチ頭の所謂技術屋さん」と思われがちですが、そうではない穏やかな好好爺のようなお人柄と、ウイットな高柳先生に何度も接しています。

何の会合だったか日時も思い出せませんが、新子安の例の施設で高柳先生を囲んで楽しくお

酒をいただきながらの 10 数人の宴席がありました。お酒がすすむうちに高柳先生はこんなお話をされました。「昔、浜名湖で貝を食べて食中毒をおこすことがよくあり、大勢の人が亡くなった。それは ”ゲルトネル氏菌” によるものだよ。お金(ゲル)と寝ると死ぬという事だよ、、、」と。

(注; インターネット、Wikipedia で調べてみましたらドイツの医学者ゲルトネルが発見したサルモネラ菌の一つ、ゲルトネル菌。 また、昭和 17 年の浜名湖アサリ貝毒事件の詳細がありました)

前髪のお話は有名ですが、色々な分野のことが硬軟織り交ぜてお話ができる方ですね。こういう才能は、学び身につけなくてはいけないことだとつくづく思いました。

丁度このような楽しい会話が弾んでいたところへ工場から電話がかかってきて、高柳先生は「VTR の画が出たそうだ」とたいそうお喜びでした。詳しいことは分かりませんが、いくつかの VTR のプロジェクトが軌道に乗り出した頃の事だと思います。

4、ディスコマの導入と高柳先生のご決断

マーケティング課在籍当時、米国の業界紙 ” Home Furnishing Daily ” を読んで情報を関係部門に発信するのが私の日課の一つでした。当時、ビクターはジュークボックスを手がけるべく検討されていて、原田電気開発のジュークボックスを一時金 3000 万円で導入していましたが、横目でみていて構造的にも将来性を危惧していたこともあって、小さな写真入りの ” DISCOMA ” の新聞記事に飛びつきました。スイス ローザンヌにある ジュランベックス社 (GERINVEX SA) の製品で、CD30 枚を演奏する CD チェンジャー、主要メカ部分 FOB US\$35.75 と云う記事です。

早速、高柳専務へご報告、物になるかもしれないからサンプルを取り寄せ検討しようということになったのですが、先方は誰か来たら渡すというので徳光さんのご指示で当時欧州に滞在していた郷さんに依頼しサンプルを送ってもらうことができました。

届いたサンプルは、新聞記事写真のと通りのメカ部分だけでしたが高柳専務の招集で、音響機器(事)平尾さん、ステレオ(事)鈴木さん、回転機器(事)金子さんその他関係者の方々に集まっていたいただき協議の結果、平尾さんは業務用ジュークボックスへ利用が可能、鈴木さんは民生用 CD チェンジャーに、金子さんは自社モーターの採用と CD30 枚では業務用ジュークボックスへの応用はできないので CD100 ～ 200 枚のメカへの改造設計が必要、等々課題も多いことが確認されました。

その結果、高柳専務が開発者であり社長の Jean Foufounis (以後 F 氏)を日本へ招聘して提携交渉をする事を決断されました。

ところが F 氏からは、地球の裏側の遠方の日本へは行きたくないという返事。このことを社長室の増田さんにご報告しましたら「社長室で旅費と滞在費全部持つから呼べ」という。当時のお金で 150 万円を用意され、高柳専務名で招聘状が発送されました。

昭和 40 年 (1965) 3 月 21 日から 4 月 1 日まで品川プリンスホテルに滞在していただき連日打ち合わせが続きましたが、特に金子さんとはメカ関係の詳細について、また特許部村上さんは日本における専用実施権の取得、ところがこれが難航しました。これには増田さんの一計が大きな支えになって専用実施権が取得できたことを身をもって体験しました。

このディスコマの導入で特機(事)では、業務用ジュークボックスの販売網の構築ができ次の業務用カラオケ事業への足がかりとなって大きな収益を上げることに貢献することができたのです。

そのほか沢山のドラマがありましたが振り返ってみて、当時は会社組織もシンプルだったこともあって縦横の風土があったように思いますが、このときの高柳先生の先見性、洞察力と決断がなかったらタダの新聞記事で終わって、大きな事業への発展はなかったことは間違いありません。

高柳先生のご指示を忠実に履行された関連部門長の力量の大きさが際立っていたように今感じます。 また、この後もいろいろご鞭撻をいただいた増田さんという懐の大きな人物の存在も忘れることができません。

多くの関係者が物故者となりましたが、高柳先生をはじめ多くの諸先輩から沢山の事を学ばせていただき、有意義で充実した会社生活を送ることができましたことを感謝しています。



(メカの打ち合わせに長時間かけた)



(羽田空港見送りに参集した面々)



(1965.4.2 羽田空港見送り 高柳専務と金子さんに謝意を表し肩に手をかける F 氏)

(2015 年 1 月 浅井信義 記)

(注： 日時は、私のアルバムの記録から転記。 その他 NHK 資料参照)

以上